関西自然保護機構会誌 *28*（2）：*213－214*，*2007*

カシノナガキクイムシによるナラ枯れ害

京都大学名誉教授・関西自然保護機構名誉会員　四手井綱英

Damage of deciduous oaks by *Platypus quercivorus*. Tsunahide Shidei（*Emeritus Professor of Kyoto University and Honorary Member of the Kansai Organization for Nature Conservation*）

今西さんが湖北の山を越えて，野坂岳を登り，敦賀へ出る山行きをしようというので，一緒に行くことにした。70年も昔の話である。古い話だが，これは話さなければならない理由があるのだ。

志賀と福井の県境付近は，国有林である落葉広葉樹だった。ミズナラの大木が群生してコナラも混じっていた。ところが，主にミズナラだったが，群生のまま枯死していた。切られた木もあったので，原因が分かったが，ナガキクイムシに犯されての枯死であった。木が枯れるのは，ナガキクイムシが樹体内に持ち込んだ病原菌（*Raffaelea quercivora*）によって，道管の通水機能が完全に停止するためだという。今西さんもこのころは昆虫の学者で，捕虫網などの採集具をもち，採集をやりながらの山行きであった。ナラ類がキクイムシにやられると,その害は次々伝播し，このあたりのナラを主とする天然林は大打撃を受けることになる。

山行きから帰って早々，大阪営林局の局長に会い，湖北の落葉広葉樹林がナガキクイムシにやられはじめている。捨てておけば，大変なことになる。できるだけ速やかに昆虫研究者を鞭撻して対処を考えるべきだと話した。

局長は近藤助さんだった。彼は林学出身の科学者だから分かると思っていたのだが，全然放ったらかしで，すっかり当てがはずれた。こんな事情で，ナガキクイムシの害は，60年ほどかかって，湖北のナラ林を食害しながら比叡山まで来たらしい。

最近，京都の東山でもこの害が起こっているらしいが，私は，もう山にも行けないので，誰か調査をして防いでくれないかと思っている。

林業のように用材になるスギ，ヒノキ等の針葉樹を主林木と考えるようでは，なんともならない。落葉広葉樹は常緑広葉樹と共に温帯下部の森林をつくる重要な林木群であると考える。森林生態学者の中にも常緑広葉樹のシイ・カシ類の林を重要視して，落葉広葉樹を軽視する人があるが，困ったものだ。

［編集委員注］

福島県の国際交流（http://www.kyoukai.pref.fukushima.jp/kokusai/contents/kyoryoku/kensyuin/H15/kenshuin_hokoku6-1.html）によれば，「カシノナガキクイムシによるナラ類，シイ・カシ類の被害は，1934年に九州で，1947年に本州で，1950年に四国で初めて確認され，2002年までに被害が確認された地域は，１府17県に達する」とされています。四手井先生の記憶が正しければ，1930年代には近畿圏でもカシノナガキクイムシの被害が見られたことになります。四手井先生の記憶は通説とは異なる被害発生年代を示唆

していますが，発生場所等に関しては，検討に値する記録であるとの考えから，本誌に掲載を推薦する次第です。